野風増（のふうぞ）

山本寛之

いいか、男は
生意気ぐらいが丁度いい

野風増とは「生意気」とか「意地っぱり」
いった意味を持つ岡山県地方の言葉。

野風増

昭和六十一年十二月二十日　第一刷発行

定価　一二〇〇円

著者　山本寛之

検印省略

発行者　石川晴彦

発行所　株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二―九

〒101　振替　東京二―八七五二七番

☎(03)二九四―一一二九(編集)・一一三三(販売)

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

印刷所　大日本印刷株式会社

©Hiroyuki Yamamoto 1986 Printed in Japan ISBN4-07-924810-5

野風増

山本寛之

野風增

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

一、雨の日の別れ……7
二、父と子の生活……31
三、いじめられっ子……52
四、ガマセゴの唄……75
五、青春真っ盛り……99

六、妻と女の間……122
七、息子の反抗……146
八、交響組曲『野風増』……174
あとがき 196
野風増 198
ガマセゴの唄 200
山本寛之年譜 202

編集製作●オリジン社
著者撮影●中原正浩
装丁●小島鐵雄

一、雨の日の別れ

「じゃあ、わたし行くわ」

妻の奈緒子はそう言ってキッチンの椅子をずらしながらゆっくりと立ち上がった。外はどしゃぶりの雨である。

（なにもこんな雨の中を……）

口まで出かかった言葉を私はあわてて飲み込んで「そうか」とだけ言った。どんな形であれ、いまになって引きとめるような言葉を吐くことはできない。未練がないと言えば嘘になるが、それ以上に、未練がましく思われることに私は耐えられなかった。

「ママ、ママ、どこへ行くの？」

奥の部屋で一人で遊んでいた浩一が、母親の出かける気配を察して走ってきた。つい二週間ほど前にやっと四歳になったばかりの一人息子である。

「ママはちょっとお出かけよ。浩ちゃんはパパとお留守番しててね」
「いやだ！　ボクも一緒に行く」
いつもはききわけのいい浩一が激しく泣き出した。子供心にも何かを感じているに違いない。そんな浩一から逃げるように妻は玄関口に行って靴を履こうとした。浩一が悲鳴のような泣き声をあげながらその後に追いすがる。
「よし、そこまで送ろう」
私は妻を駅まで送っていくことにした。そうやって時間稼ぎをするほかに浩一を母親から引き離す方法はないと思った。
外へ出ると雨はやや小降りになっていた。ブルーの長靴を履いた浩一は、雨の中ではしゃぎ回った。両親と出かけられるのが嬉しいのだ。雨といっても季節は夏だから、少々ぬれたところで風邪をひく心配はなかった。
私と妻がほとんど同時に傘をひらくと、走ってきた浩一は母親の傘に飛び込んだ。
「さあ、浩一、お前はパパと一緒だ」
そう言って手をつなごうとすると「いやだ。ママと一緒だよ」と浩一は私の手をじゃけんにふりはらった。
妻は傘をさしたまま道端にしゃがみ込むと、浩一の右肩に手を置いて話しかけた。

「浩ちゃん、いいこと、ママのお話よく聞いてね。ママはこれからちょっと遠い所にお出かけするのよ。すぐには帰ってこられないから、浩ちゃんはしばらくパパと一緒にいなくてはならないの」

「……」浩一は、自分がどうやら母親と一緒に行けないらしいことを知って、急にむずかしい顔になったが、母親のいつにない真剣な表情を見てあきらめたのか「おみやげ買ってくる？」と口をとがらせながらきいた。

「ええ、いっぱい買ってくるわよ。浩ちゃんがお利口にしていたらね」

おみやげの約束ができると浩一は急にニコニコして「ぼく、お利口だよ。パパと一緒に行く」と言いながら私の傘に入ってきた。

アパートから駅までは六分ほどの道のりである。雨の中を寄りそうように歩く私たちの姿は傍目には仲のよい親子連れとしか映らなかっただろう。だが二人の間には、もう語るべき言葉がなかった。妻は私のもとを去って他の男と暮らす、浩一は私が引き取って育てる——これが三カ月かけて得た二人の結論だった。

休日のせいか、昼どきの駅前はけっこう人出があった。妻は切符を買って戻ってくると「ことでいいわ。この子、頼むわね」と浩一に聞こえないように小声で言うと、きびすを返して足早に改札口に向かった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

私に抱かれた浩一は、遠ざかっていく母親の後ろ姿を目で追いながら、すっかりご機嫌で、しきりにバイバイの手を振った。

「ママァ、早く帰ってきてねェ〜」

浩一が精いっぱいの声を出して叫んだ。その声がとどいたのか、妻は足を止めるとクルリとこちらに向きなおり、手を高々とあげて浩一に合図をした。

母と子はしばらく手を振り合っていた。それから妻は駆け足で駅の階段をのぼっていった。そのとき私は——もう遠く離れてしまって見えるはずもないのだが——妻の頬をつたって落ちる涙をはっきり見たように思った。

母親の姿が見えなくなると、浩一は私を見おろして「ママ、おみやげ買ってくるかなア」ときいた。さっきの不安がよみがえってきているようだった。私はつとめて明るく軽い調子で、

「ああ、買ってくるよ。ママはいつだって約束は守るだろ」と言った。

「ウン……早く帰ってこないかなア」

「いま行ったばかりじゃないか……それより浩一、お腹すかないか？」

「ぼく、すいた」

「よし、昼めしを食おう。さあ、もうダッコはおしまいだ」

そう言って私は浩一をおろした。ふだん抱きつけない腕はすっかりしびれてしまっていた。

私は浩一がいつの間にか大きくなっていたのに驚くと同時に、この重さはこれから父子二人で暮らしていかなければならない現実の重さであると思った。

すべての責任は私にあった。もっともそのことに気がついたのはずっと後になってからで、最初から気づいていれば私たちは別れることもなかったのである。

当時の私は仕事がめちゃめちゃに忙しく、ほとんど家庭をかえりみる暇がなかった。週に二日は仕事場で徹夜をし、帰る日もきまって深夜だった。その上、家でも仕事をするので、寝る時間は三時間くらいしかない。妻と話をする時間も子供と遊ぶ時間ももてるわけがなかった。

そんな毎日の連続にも私は少しも不満をもっていなかった。むしろ張り切って仕事に取り組んでいた。長い間、売れない作曲家に甘んじていた私に、ようやくチャンスがおとずれようとしていたからだ。

どこにも所属しないフリー商売の人間にとって、忙しいということはありがたいことなのだ。妻と一緒になって以来、食うや食わずできた私は（このチャンスを絶対のがしたくない）と必死だった。

事実、経済状態は日に日によくなっていた。ついこのあいだまでは親子三人で百科辞典の訪問販売会社の寮住まいをしていたのだ。家に食べるものがなくなって、むろん買う金があるは

ずもなく、深夜に隣室の同僚とボロ車を走らせて郊外の畑に野菜を失敬しにいったこともある。

それでも音楽への夢だけは捨てずにがんばってきたことが、いまようやく報われようとしているのだ。そんな私になんで仕事をセーブすることができただろう。

だが妻の考え方は違っていた。夜はきちんと帰ってきて親子三人水いらずで食事をし、休日は休日で子供を連れて遊園地にでも出かけていくような生活を妻は望んだ。

「私と仕事とどっちが大切なの？」

仕事が忙しくなるにつれて、妻はことあるごとに不満を口にするようになった。

「バカ！　そんなことが比べられるか。第一、俺が何のために働いてると思うんだ。おまえたちのためじゃないか」

ここから先は理屈にならない理屈をお互いに言い合って、平行線をたどるばかりなのだが、あるとき私がいつものように「女房子供のために……」と言うと、妻は「違うわ」といやに断定的な口調で言った。

「……違うって？……何が違うんだ！」

私が思わず気色ばんだ声を荒らげると、妻は臆する気配もなくこう切り返してきた。

「あなたは私や浩一のために働いてるんじゃない。ただ自分がしたいこと、好きなことをして

いるだけだわ」

この言葉は私の胸にグサリと突き刺さった。女房子供のためという言葉に嘘はない。現実に私の仕事で一家が生活しているのだから、私が働くのは家族のために……である。だが、私がいままでどんなに苦しくとも、貧しくとも、音楽の道から一度たりとも離れることがなかったのは、妻が言うように「好きな仕事」であったからにほかならない。そうでなければ私はとうの昔に、もっと楽で実入りのいい仕事についていたはずなのだ。

「バカ！」

私はどなるが早いか、妻の頬を思いきりなぐりつけていた。だが、この妻の一言以来、私たち夫婦の間には決定的な深い溝ができたようだった。私は自分の痛いところにさわられたくないために、ますます妻の愚痴を聞く耳をもたなくなった。

妻も以前のような愚痴はあまりもらさなくなった。私はそれをもっけの幸いに、仕事仕事の生活を続けた。その頃の私は渋谷に小さな事務所を持っていた。その事務所は友人の持ち物で、最初私はそこを使わせてもらっていたのだが、その友人が別の仕事をやるというので引き継いだものだった。

引き継いだ当座はろくな仕事もなく、音楽事務所とは名ばかりだったが、国民金融公庫から借金をしてピアノを入れたりして、何とか体裁をととのえた。また偶然のことから私は六人の

タレントやモデルのマネージャー業を引き受けることになった。

いわばマネージャー業と作曲家の二足のわらじを履いたわけだが、結果的にはこの妙な取り合わせが私に作曲家としてデビューするチャンスをもたらしてくれることになった。

作曲という仕事は、看板をかかげていれば仕事の注文があるわけではない。また売り込みにいくのもおかしな話で、「私、作曲ができます」と売り込んだところで、実績のない人間に仕事を頼む人はまずいない。

唯一の可能性は、自分の曲を歌手に歌ってもらい、レコード化することだが、これとて実績のない者にそうやすやすとチャンスはめぐってこない。つまり私のようにただ音楽が好きで、ほとんど独学で学んできた人間に、音楽業界の門戸は能うかぎり狭かった。

その私にチャンスを与えてくれたのが、マネージャー業だったのだ。あるとき所属モデルの女性に大手化粧品メーカーから仕事の口がかかり、そのマネージャーとして出入りしているうちに、その会社の広告担当者から「山本さん、あなた作曲やってるなら、ついでにうちのCMソングでも作ってみたら」とすすめられた。

私は大張り切りで作曲をし、幸いにしてそれは採用された。ある化粧品シリーズのテレビCMとして、私の作った曲は美しい映像と共にお茶の間に流された。自分で言うのもおかしいが、その曲はなかなか評判がよく、テイチクから『奪われそうな口唇』としてレコード化され

たのである。

CMソングの作曲と相前後して、私にはもう一つ幸運な出来事があった。そのころ大ヒットしていた劇画に「同棲時代」という作品があった。先ごろ惜しくも早逝された上村一夫氏の作品である。私はこの作中の詩に曲をつけて、版元の出版社に持ち込んでいた。

この企画には版元の編集担当者も原作の上村氏も興味を抱いてくれて、大信田礼子の歌でこれもレコード化されることになった。もっとも、この企画は土壇場で、当時売れっ子作曲家だった都倉俊一氏と大信田礼子のコンビでいくことになり、私の曲は後回しにされてしまったのだが、それでも『同棲時代その2—朝顔日記—』のタイトルでともかく世に出たのである。

私は自分の夢を実現する手がかりだけはつかめたと思った。何とか作曲家として食べていけるかも知れない——経済的にはまだ恵まれるところまではいかないが、編曲の仕事なども私はどんどん引き受けて、ともかく音楽で一人立ちすることに余念がなかった。

これがもし浮気とかギャンブル狂いをしていたというのなら、私も妻の不満にもっと耳を傾けたことだろう。自分に後ろめたいところがあれば懐柔しようとしたに違いない。だが、私は後ろめたいどころか、妻はもっと私に協力するべきだと考えていたのだ。

「おまえは俺が忙しくなったことをもっと喜ぶべきなんだぞ」

私はよく妻に言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.